



# KIFA Plaza

鎌ヶ谷市国際交流協会広報誌

第66号

2010年(平成22年)1月15日  
 発行：鎌ヶ谷市国際交流協会  
 〒273-0195 鎌ヶ谷市新鎌ヶ谷2-6-1  
 TEL 047-445-1141 (内550)  
 FAX 047-441-9400  
<http://www.kifa.gr.jp>

## 「養父母の恩はぜったいに忘れない」

中国残留邦人の話を聞く会

「中国の養父母の恩はぜったいに忘れない」——日本に帰国している、すべての「中国残留邦人」の声を代表するように、千葉県中国帰国家族自立互助会会長の安達大成さんは話し続けました。さらに副会長の河村峯男さん、千葉市残留邦人の4人と、鎌ヶ谷市の残留邦人4人のうち出席された3人は、64年前に中国東北部(旧満州)で何があったのか、奇跡的に生き延びて、中国人の養父母に育てられ、日本に帰ってくるまでの体験を語ってくれました。



二胡の演奏で歌を披露する千葉市の残留邦人の皆さん

KIFA「中国残留邦人の話を聞く会」が、10月25日(日)まなびプラザで開かれました。会は、はじめに鎌ヶ谷市で残留邦人の支援・相談活動と交流を続けている研修部会の藤井明恵さんの司会で、出席された残留邦人の皆さんが紹介されました。現在、千葉県の在留邦人は246世帯、そのうち安達さんはご夫婦ともに残留邦人です。千葉市



### 安達大成さんの講演

- ・なぜ、残留孤児になったのか
- ・日中友好の架け橋になりたい

からは前記の2人のほかに、二胡の演奏と歌を披露してくださる残留邦人4人。

鎌ヶ谷市在住の残留邦人は、3人が来てくれました。その他、応援・通訳として船橋市の残留邦人ら友人、家族の皆さんが16人、一方、話を聞く一般市民はボランティアを含め38人が参加しました。



講演を聞く参加者の皆さん

「64年前、ロシア国境から300キロの北満州で、私たちはどれだけ苦しい思いをしたのか、だれのせいでこうなったのか。日本軍国主義の侵略戦争による『満蒙開拓団』が一番苦しい被害を受けた。ソ連軍があつという間にきたとき、男はみんな兵隊に取られて、残っていたのは老人と女性と子どもたちばかりになっていた。7歳くらいから2、3歳までの子どもを連れて、収容所を移動するために、100kmを超す道のりを歩かされた。

### ◎二胡の演奏で合唱のあと懇談会

安達さんの講演のあと、千葉市から来られた4人の方による二胡の演奏と歌が何曲も披露され、会場は二胡の哀切なメロディーに包まれました。なかでも「北国の春」の替歌で歌う「棄てないで3乗」の歌詞は、辛苦の数々が切なく思われ、参加者も全員一緒に歌いました。

このあと、残留邦人と通訳の方々には、3つのグループに分かれていただき、参加市民たちと、それぞれの体験や養父母との出会いの状況、中国の生活、日本での肉親との出会いなどのお話を伺い、私たちも残留邦人のご苦労の一端を肉声で聞くことができました。

そして、この日、ソ連との国境付近での悲劇を目撃しながら、どうしようもなくシベリアに抑留され、帰国された市内在住の方が来ておりました。(4面の編集後記に続く)

水を飲みたい。私は12歳であったが、友だちと3人で水筒を3本ずつ持って、中国人の庭の井戸に水を汲みに行った。大きな音を立ててしまい、一斉に中国人が起きて来て武器を持って追われた。必死に逃げたが1人はついに帰ってこれないままだった。

侵略者の日本人は、中国人にどんな酷いことをしてきたか。どれだけ憎まれていたか。捕まったら殺される。『満蒙開拓団』の残された主婦や老人はみな、そう思い大地の原野で家族は散りじりになった。途中、小さい子どもや身体の弱い女性や老人は死んでいった。

中国人はいい人たちだった。養父母がいなかったら、いま私たちは永遠にここにはいない。生きていられるのは、私たちを救ってくれた養父母のお陰だ。1981年に帰国するまでの47年間の恩は絶対に忘れない。生きている限り日中友好の架け橋として役目を果たしたい」

## KIFAパーティ2009年

## 外国人参加者の飛躍的増加！

## 国際色豊か・熱気あふれる集い



司会の野村さん



清水聖土市長



酒井哲郎会長

## 司会は3か国語でスピーチ

12月13日（日）午後1時30分、鎌ヶ谷市総合福祉センター6階の大会議室。パーティは広州出身、中国名「陳燕玲」の野村千賀さんによる日本語、中国語、英語の3か国語の司会でスタートしました。酒井哲郎会長の開会あいさつのもと、来賓のあいさつに立った清水聖土市長も、司会の要請に応じて、中国語でスピーチをしました（あとで自ら邦訳）。元外交官の面目躍如です。「来年は成田新高速鉄道が開通し、外国人在住者や旅行者も増加する趨勢に対応し、市として外国語の案内板を市内各所に設置する予定です。草の根交流も重要になりますから、KIFAの役割に大いに期待しています」。池ヶ谷富士夫市議会議長の音頭で、「カンパニー」の声が会場に響き渡りました。

## 〔ブース〕国際交流のカラー満ち満ちて

ブースの周辺は和やかな雰囲気満ちていました。出展したのは鎌ヶ谷市、子ども英会話教室、ペルー、香港、ハングル教室の5つ。それぞれの活動やお国を紹介する写真やポスターがビジュアルにパネル展示され、テーブルには工芸品が所狭しと並びました。お菓子、香港粥、韓国茶、ペルー紹介のDVDなども人気を集めました。韓国や中国の民族衣装を着た女性もブースをバックに記念撮影におさまり、国際交流の色彩を豊かにしました。



民芸品を展示するブース



鎌ヶ谷育ちのソプラノ歌手河内夏美さん



「聖夜」を歌う子ども英会話の子どもたち

## 〔アトラクション〕熱演に大盛り上がり

アトラクションは2時過ぎから始まりました。

一番手は中国武術・太極拳の模範演技です。上森祥一さんと壇原節子さんが、舞台上で時に激しく、優美に数々の型を見せてくれました。つぎに河内夏美さんのソプラノ独唱。彼女は生まれも育ちもご当地・鎌ヶ谷市、東京芸大出身のオペラ歌手です。オペラ「蝶々夫人」より「ある晴れた日」、童謡「通りゃんせ」を朗々と歌います。ナマの美しい声に会場はすっかり魅き込まれました。

KIFAパーティ2009。今年の特色は、外国人参加者数が飛躍的に伸びたことでした。その数40人（12カ国）、全参加者の20%（前年12.5%）を占め、例年に増して国際色豊かな、熱気あふれる集まりになりました。



会場のあちこちでは子ども、外国人、市民らが交流の輪をつくる

## 〔会場・食事〕みんな笑顔笑顔の食事と会話

8つのテーブルには、「味・匠の会」によるサンドイッチやフルーツの盛り合わせに加え、オードブル、助六寿司の盛り合わせが綺麗に配置されました。

それぞれのテーブルでは、チマチョゴリを着た少女たち、中国人と鎌ヶ谷市在住の中国残留邦人、外国人と市民たちが和やかに話しています。

ロビーには鎌ヶ谷市茶道協会の皆さまのお点前で、お茶席が設置されました。105人の方々がお茶とお菓子のおもてなしを受けました。

パーティのフィナーレは、全員参加のビンゴゲーム。景品は、茂野製麺（株）、東葛食品（株）にご協力いただきました。ゲームの進行役は、フィリピン出身の小山田ジェンマさん。大きな、よくとおる声で数字を英語で読み上げます。景品を獲得した人も、ハズレた人も、みんな笑顔笑顔でした。

今年のパーティはボランティアが協力し合い、また、若い外国出身のスタッフが積極的に企画・参加したことに、KIFAの新しい可能性を感じる1日でした。

続いての舞台にはKIFA子ども英会話「スマイリー・キッズ」の子どもたちが登場。ノア・ウイルソン先生の指揮で「聖夜」を英語で合唱しました。

その直後、会場には大音響とともに、千葉大韓国人留学生の会の男女6人が、それぞれ民族楽器を打ち鳴らし行進。豊作を祈る韓国の民族音楽「サムルノリ」の演奏が始まりました。太鼓や銅鑼の音は雷、風、雨、雲を表現しすごい迫力です。アトラクションの熱演につぐ熱演で会場は大いに盛り上がりました。

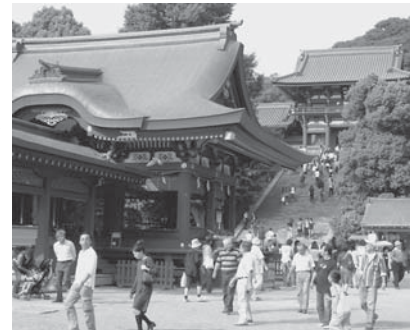




城ヶ島の岩場で交流



美味しい昼食会



鶴岡八幡宮を歩く

### ◎外国人12カ国39人が参加

秋の恒例イベント「KIFAバスツアー」。回数を増すごとに会員や在住外国人、一般市民の人気も高まり、今年も9月27日(日)の城ヶ島から鎌倉方面へのツアーには、定員一杯の98人が参加しました。一行はバス2台に分乗し、予定通り7時30分に鎌ヶ谷市役所を出発し、一路、最初の目的地、城ヶ島へ向かいました。

参加者のうち外国人は11カ国・1地域の39人。その内訳は中国9人、スリランカ、ベトナム各5人、ナイジェリア4人、韓国、アメリカ、台湾各3人、ブラジル、フィリピン各2人、ネパール、インド、バングラデシュ各1人でした。今回特筆すべきことは、鎌ヶ谷市在住の中国残留邦人5人(家族含)が参加したことです。

(1面に「残留邦人の話を聞く会」)

### ◎自己紹介で 和やかな雰囲気

バスは湾岸道路を快適に走ります。左手に東京ディズニーランド、葛西臨海公園が次々と見えてきます。車内では、参加者全員が前席から順に自己紹介です。KIFA外国語講座の英語講師も日本語と英語を混ぜて一生懸命です。お互いそれぞれの国や

仕事などを知り、和やかな雰囲気になっていきます。お台場を通り、羽田空港の下をトンネルで抜け、バスは川崎、横浜の京浜工業地帯のコンビナートを見下ろしながら疾駆します。戦後日本の経済成長の象徴的風景、中国残留邦人や外国人にはいかに映ったでしょうか? 途中、大黒インターで休憩をし、横浜ベイブリッジを一気に渡り、バスは三浦半島をひたすら南下し、最南端の城ヶ島には10時に到着しました。

城ヶ島公園の駐車場から海をめざし歩きました。馬の背洞門を見るため、海辺の岩礁まで下りて記念撮影をしているグループもいます。なかには磯遊びをしている外国人親子も。昼食は島の対岸に三崎港が望める「しぶき亭」という食堂で、マグロなどの新鮮海の幸料理を堪能しました。

## 国際交流の輪が広がる

### KIFAバスツアー「城ヶ島から鎌倉」へ



左…1号車 右…2号車の皆さん

### ◎鎌倉観光のあと自由散策

いざ鎌倉。相模湾に面した葉山マリーナ、逗子海岸を通り抜けると、遠く左に「緑の江の島」が浮かんでいます。快晴なら「真白き富士の嶺」が優姿を見せるはずですが、あいにく雲がかかり見えませんでした。

午後1時すぎには、長谷の「鎌倉大仏」と対面できました。外国人参加者は、750年前に建立された高さ12メートル、総重量121トンの巨大な仏像に、驚嘆の声を上げ、しきりに写真を撮り合いっこしています。大仏様の胎内拝観も人気で、長い列ができていました。

次は大仏と並ぶ鎌倉の代表的名所、鶴岡八幡宮です。ここで私たちはバスの1号車、2号車に分かれて集合写真を撮る記念撮影のあと、境内を巡りました。

そして4時まで古都自由散策です。みんなはお土産を買う観光客でにぎわう、若宮大路や小町通りに繰り出しました。バスガイド推薦の「紫いもソフトクリーム」を女性参加者の多くは食べていました。お土産は鎌倉名物「いも羊羹」や「鳩サブレ」を買ったようです。

### ◎熱く盛り上がったゲーム大会

帰路のバス車内では、ゲーム大会が開催されました。座席タテ列対抗の「ハチマキリレー」では白熱した競争が展開され、大人も子どもも、日本人も外国人も協力して大いに頑張りました。続いての「ビンゴ大会」もビンゴを目ざして熱く盛り上がりました。最後の人が景品を受け取る頃は日とつぷり暮れ、バスは予定通り午後7時に無事に鎌ヶ谷市役所に戻りました。

## 「交流カフェ」 誕生から1年 クリスマス交流会

ジングルベル ジングルベル 鈴が鳴る——08年の12月から始まった「交流カフェ」もちょうど1年。12月6日(日)のカフェは「クリスマス会」でした。ケーキとお茶をいただき、まりもさんの歌唱指導と交流部会の石関博康さんのシンセサイザー演奏で、「聖夜」などクリスマス・ソング3曲を大合唱。そのあとは、韓国、フィリピン、中国、バングラデシュ、スリランカ、ブラジルなど20人の外国出身の皆さんが、自己紹介と自国のクリスマス風景を紹介しました。

最後はビンゴゲームです。ビンゴが出るたびに、歓声とため息で会場は盛り上がり、KIFAボランティア、市民ら合わせて40余人が、クリスマス交流会のひとときを楽しみました。

\*これからの交流カフェの予定——1月10日(日)お正月会(終了)▽2月14日(日)料理講習会(下記参照)▽3月14日(日)春祭り(会場は中央公民館)



まりもさん指導でクリスマスソングを歌う



まりもさん



ビンゴ一等賞の景品贈呈

### ■米国弁護士・ヘンリー幸田さん講演会「天才エジソンを育てた母の教え」

11月29日(日)に三橋記念館視聴覚ホールで開催。幸田さんは「エジソンの成功の秘訣」を、何回失敗しても諦めないことだと語りました。詳細は次号で。

### ■第3回「英会話サロン」アラスカ留学体験など

2009年度第3回「英会話サロン」が11月8日(日)に市総合福祉保健センター6階大会議室で開かれました。

外国人ゲストスピーカー3人。ドイツ出身のJan-Dirk Winkelhausさんは「東西ドイツの壁崩壊から20周年の暮らし」。アメリカ出身のKatherine Coxさんは「アラスカのホームステイ体験」。カナダ出身のHubert Chowさんは

「日本の大学入試と勉強しない大学生」がテーマでスピーチ。37人が英会話を楽しみました。

### ■イベントのお知らせ

#### ◆KIFA語学研修講座閉講式

日時：2月11日(木)13時30分～

会場：市総合福祉保健センター6階大会議室

#### ◆KIFA外国家庭料理講座

日時：2月14日(日)午前10時～14時

会場：東初富公民館

講師：堀優子先生、今回は日本の家庭料理を外国人の皆さんにコーチします。

費用：会員・700円、非会員・1200円

## 国境の記憶、忘れられない少女

——編集後記に代えて

1面で紹介しましたように「中国残留邦人」の方々のお話を伺って、日中戦争とくに「満蒙開拓団」がどんなに悲惨なものであったか、改めて知らされました。

この会には、中国東北部(旧満州)からシベリアに4年間抑留され帰国した、市内在住の方が出席されていました。戦争終結を知らされないまま、その方たちの部隊はトラックで移動中、おばあさんと3歳くらいの女の子に出会った。母親はいなかった。きっとソ連兵に拉致されたのだろう。おばあさんは「私はどうでもいいから、この子だけは助けてください」と頭を道にこすりつけて頼む。戦争終結を知らされていない部隊は、これからの作戦に支障があるからと、振り切つて(見捨てた)その場を去った。

この方は、このときの光景がトラウマとなって、目

に焼きついて離れない。いまでも3歳くらいの女の子を見るとたまらなく切なく、立ち去り難い気持ちになるという。この3、4歳の女の子が保護され、その後、日本に帰国しているのか、どうかはわからない。

「話を聞く会」に出られた、残留邦人の皆さんの帰国までの中国における生活、肉親との再会までのヒストリーについて、詳しく知ることは出来ないが、一人の方が手の甲にかすかに残る「蒼い点」を示して、「別れ際に、父がペン先を強く押し込んで付けた」この印が、肉親再会の確認の決め手になりましたと、見せてくれました。

講演で安達さんも言われましたが、帰国して最大の障害は日本語ができないことでした。80年代前半に帰国して30年近く、この日の会でも、通訳なしではお話ができない残留邦人もおられました。「私たちは日本人なのか、中国人なのか」——この問いにどう答えたらいいのだろうか。(T)